課題別看護における授業効果の検討 ーラベル新聞の活用を試みてー

The Assessment of the Effectiveness of Nursing Classes for Each Assignment -Attempting to Utilize Labeling Newspaper-

澁谷 貞子, 永田 美和子

要 約

課題別看護においてラベル新聞を活用し、授業効果の検討を行った。結果、毎回の学びのラベル新聞を活用することで、学生はグループの学びを共有し、学習の方向性が明確になり、次回の学習課題が明確になることや、教員はラベル新聞の報告を受けることで、話し合いの内容や参加状況の把握ができ、指導方向が明確になることがわかった。また、中間報告会は、学生の自主的な企画・運営・積極的な意見交換の場となり、授業効果が見られ、参画学習への発展の場となることが考えられた。

キーワード：ラベルワーク，課題別看護，ラベル新聞，授業効果，中間発表会

はじめに

K短期大学では、2年次後期に課題別看護を学習する。これは、看護専門科目の選択科目に位置づけられ、3単位の科目であり、「クリティカルケア看護」「がん看護」「救急看護」「感染症看護」「家族看護」「ターミナル看護」の6分野から1分野を選択し、討議・文献などを活用した主体的学習の場である。

澁谷らの2004年の研究¹⁾では、ラベルワークを活用することで、「クリティカルケア看護」「がん看護」の開始前とまとめの段階で、各看護のイメージについて、初回のイメージがより具体的に変化していることを学生自身が実感し、学びを明確にでき効果的であった。また、参加の姿勢から考察すると、第2段階の「参与」型であり、その理由として教員の動機付けによる学習内容であることがわかった。しかしながら、学習過程での学びは不明確であった。

そこで、今回の研究では日々の学習の後に、ラベル新聞を作成することで、誰が何を感じ、何を考えているのか、個人の学び、グループの学びを明確にすることを目的にした。

課題別看護実践方法

- 1) 対象：K短期大学2年生で「ターミナル看護」を選択した4グループ各6～7名の計26名
- 2) 期間：平成16年10月19日～平成17年3月18日
- 3) 授業方法：1回2時間の計15回をチュートリアル方式で実施した。16回17回は発表準備で、18回～20回は発表である。
 - ①「ターミナル看護」を選択した26名の学生に、学習開始前に初回のテーマとして「ターミナル看護とは」でラベルワークを実施した。ラベルは1人3枚。
 - ②毎回討議後に今日の学びのラベルを作成し、持ち回りでラベル新聞を作成、コピーを全員に配布した。
 - ③7回目に中間発表をし、各グループの今後の討議の方向性を確認した。
 - ④14回目に「ターミナル看護について」のまとめのラベルワークを実施。ラベルは1人3枚。
- 4) 倫理的配慮

学生に、本研究の主旨を口頭で説明し、研究協力・非協力は評価には関係ないこと、秘密保持を説明し、同意を得た。

ラベルワークの方法

林²⁾のラベルワーク技法を用いた。

各自がテーマに沿って3枚複写ラベルを用いて、自分の考えを文章で記録する。その際、必ず自分の氏名も記入する。1枚はグループワークに使用。1枚は自己の学びのポートフォリオに使用。1枚は教員に提出する。ラベルをもとに、図解を用いてグループ討議をする。

今回はその他に、毎回の授業終了10分前に、「今日の学び」のラベルを書き、その1枚を用いてラベル新聞を作成することにした。新聞作成者は持ち回りにした。

結果 (表1)

「ターミナル看護とは」のラベルワークでは、各グループの初回のラベルタイトル・まとめのタイトルは、Aグループ：「意志尊重」、「イイ日旅立ち」。Bグループ：「その人らしい死を援助すること。」、「告知前・告知後を含め、患者とその家族が受容できるように支えていくこと」。Cグループ：「患者が死と向き合いながらも、生をあきらめないよう支える看護」、「冷静と情熱の間」。Dグループ：「生と死に向き合うケアである」、「苦痛を開放して意思を尊重しながら死の受容へと導くケア」であった。

毎回のラベル新聞は、次回の学習時間までに、持ち回りで作成し、コピーをグループメンバーに配布した。初回のラベル新聞の感想コメントでは、「テーマはひとつでも、6人それぞれに違った考え方がある。様々な意見や考え方を聞くことで自分自身の考える幅も広がる。」「グループワークは沢山の意見を聞くことができ、柔軟な考え方を持つためや、視野を広げるために、とてもよいことである。」等と、他者の意見を聞くことで個人の視野が広まることにつながるといった内容が見られた。毎回の感想コメントでは、「痛みについて調べ始めた。それぞれ調べることは決まっていたが、なかなか思うように進んでいないみたい…でも方向は定まっているのでみんなで協力して頑張っていきましょう!!」など、学習を進めていく上での苦悩やメンバーに対する励ましの内容が見られた。

また、「告知について、言葉としては知っているが、心理的な状態や看護についてあまり理解していなかったという学びもでている。また、文献が見つげづらいという学びも出た。今回のグループワークを通して、しっかり身につけていきたいと思う。」と、学習の方向の明確性や今後の課題が見られた。

第7回に中間報告会を実施した。Aグループはタイトルである「意志尊重」は、患者主体を意味している

表1 ターミナルのイメージとラベル新聞による毎回の学びのコメント

	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
初回のイメージ	意思尊重	その人らしい死を援助すること	ターミナルケアとは、患者さんが死に向き合いながらも生をあきらめないように支える看護である。	生と死に向き合うケア
結論	イイ日旅立ち	告知前後を含め、患者とその家族が受容できるように支えていくこと。	冷静と情熱の間	苦痛を開放して意思を尊重しながら死の受容へと導くケア
初回の感想コメント	テーマはひとつでも、6人それぞれに違った考え方がある。様々な意見や考え方を聞くことで自分自身の考える幅も広がる。	ターミナルケアというたった一つの言葉に幅広い意味がありました。ラベルワークについては、言い方が違うだけで、全く意味が異なってしまうので取り皿にとるのも看板を考えるのもとても難しかった。だけど、沢山の意見が聞けてよかったと思う。いいラベルワークができるために頑張りたいと思う。	この授業を通して現在の自分の死生観をもつことができそうです。	ラベルワークの看板を付けるには、簡単に考えることが大切。グループワークは沢山の意見を聞くことができ、柔軟な考え方を持つためや、視野を広げるために、とても良い事である。そして、一つ一つの意見をまとめるのは難しいが、まとめの作業は大切なこと。
毎回の感想コメント	「痛み」について調べ始めた。それぞれ調べることは決まったが、なかなか思うように進んでいないみたい…でも方向は定まっているのでみんなで協力して頑張っていきたいと思います!!	ラベルワークや話し合いの結果、テーマが「告知」に決定した。「告知」について、言葉としては知っているが、心理的な状態や看護についてあまり理解していなかったという学びもでている。また、文献が見つげづらいという学びも出た。今回のグループワークを通して、しっかり身につけていきたいと思う。	私たちのグループは小児ターミナルを中心にまとめていくことになりました。話し合っていくうちに成人のターミナルと小児のターミナルの違いはどのように異なるのか疑問になりました。やはり年齢にもよるし、育ってきた環境や生き方、人生の経験などにより一人一人個人差があるのかなあとと思います。	今回はプロセスレコードを用いてみんなの死生観を知ることができ、そして話あうことでそれぞれ個人の死生観を深めることができましたと思います。私たちの課題である「生と死に向き合う看護」として看護師の死生観を押し付けるのではなく、患者それぞれ(個性)の死生観を尊重した看護が大切だと共通認識を持たせたと思います。
中間発表時の感想コメント	中間報告おつかれさまでした。素晴らしい報告会になったと思います。今回、中間報告を行い、グループによってそれぞれ学習していることが異なっていて参考になり、刺激を受けました。このことを生かし、これからも協力し頑張っていきたいと思います!!	発表を通して、各グループがターミナルケアと同じテーマを持ってそれぞれの違った考え方・捉え方を聞くことができてとても参考になりました。また、他の班や先生方からの意見を聞き、今後の課題がより明確になったので、よい機会になりました。	中間発表を通して、他のグループのターミナルに対する考えの相似点や違う点を知ることができたよ。また、自分たちのグループの反省や課題も明確にすることができたと思う。この学びを今後活かして、より知識が深められるように頑張ろうね!!	1人1人のグループの個性が反映されていた報告会でした。「らしさ」の存在を再確認。視野を広げて色々な側面からターミナルについて考えられるようになろうね。

ことや、多くの事例を読み意見交換をする中で、痛みは麻薬でコントロールするが使用するタイミングを調べたいと考えたことを発表した。

Bグループは、「その人らしい死を迎えるための援助をする」には、告知をすることを前提に話し合ったが、果たしてそうであるのか、告知についてのアンケートをとり、告知について学習を深めたいことを発表した。また、Cグループでは、文献を読むうちに成人のターミナルと小児のターミナルの違いについて調べたいと考えたことや、Dグループは、死は特別であると言う意見と特別ではないという意見が出たため、「生と死に向き合うケア」について調べていることなどを発表していた。発表形式は様々であり、ラベルの図解を用い説明したグループや台本を作成し、ミニ演劇様に発表したグループも見られた。中間発表後の感想コメントでは、「中間発表おつかれさまでした。…今回、中間報告を行い、グループによってそれぞれ学習していることが異なっていて参考になり、刺激を受けました。これからも協力し頑張っていきましょう！」と各グループ共に、積極的に参加し、刺激をうけ学習意欲が高まったようであった。

ラベル新聞作成の感想を聞くと、視野が広まり、今後の拡大のステップになった、調べていく方向がわかる、頑張っていこうとする気持ちになれるなどの意見が聞かれた。

考 察

1) ラベル新聞の活用効果について

筆者らの2004年の研究¹⁾で、ラベルワークを活用することで学習内容がより具体的になり効果的であることが分かった。しかし、学びの過程が不明であったため、今回、毎回のラベル新聞を取り入れた。ラベル新聞の効果は²⁾、毎回その場で何が感じ取られ、何が発想されたかを図式化して、共有していく作業を行うと、大変よい前回の思い出となり、何をどのように学んでいるかを共有化できる。これは、学生のラベル新聞を作成したことの感想にもあるように、調べる方向性がわかった、視野が拡大したなど今後の課題や学習の方向性を明確にしたといえる。また、メンバーの気持ちを知ることで、頑張ろうという学習意欲が高まり効果的であったと考える。これまでのグループワーク活動を行ったときの学生の傾向として、面倒なことは避けたい、他の学生が意見を言うので自分は意見を言わなくてもいいやなど、消極的な学習であったことは否めない。しかし、日々の学びをラベルに記載し、

かつラベル新聞を作成することは、メンバーのターミナルに関する思いを知り、グループメンバーの一員として、まとめて次回までに配布するという責任感を生み出すなど、自己の振り返りもでき効果的であったと考える。

しかし、ラベル新聞を作成し、コピーを配布し、その内容をメンバーに口頭で伝えたグループと配布のみで終了したグループもあったため、より学びを共有するためには、配布と口頭での説明を加えることの統一を図る必要があると考える。これは、今後の課題である。

また、教員は臨地実習指導や会議が重なったために、課題別看護の授業に必ずしも参加できる状況ではなかった。その為、学生のラベル新聞を作成・報告を受けることで、話し合いの内容や参加状況の把握、学びの内容、今後の課題を把握でき、指導の方向性が明確にできた。したがって、ラベル新聞は、学生間の学びの共有のみならず、学生と教員間の学習の相乗効果をもたらすと考える。

ところで、「初回のターミナル看護のイメージ」と「まとめのターミナル看護」のイメージについて、2つのグループがタイトルとして、「意思尊重」「イイ日旅立ち」、「冷静と情熱の間」とつけていた。このタイトルからは学生が何をイメージしたか定かではない。ラベルを文章にすることの意味³⁾は、文章にすることでテーマさえ分かっていると、書いた人の説明なしでラベル自身が意見を発音することである。語→句→文と進むにつれて、1枚のラベルの示す意味内容が、一義的に定まり、客観性が生まれる。特に複数の人でラベル思考を行うときは、文章で書く方が効率的であるとしている。1枚1枚のラベルに書く時も、タイトルの表現でも、誰がタイトルを見ても、その意味内容を理解するためには、文章化するように指導していく必要があると考える。

2) 中間発表会の効果について

第7回目の授業時に中間報告会を実施した。

その目的は、他のグループの発表を通して、グループ間の学びを共有することである。学生の感想コメントは、それぞれの角度からターミナルを捉え学習内容が異なっていることの発見や、自分のグループの反省や課題が明確になったことなど刺激になったことが記載されていた。これらより、中間報告会の目的は達成されたと考える。

更なる学習効果として、学生自ら中間報告することで、会の運営内容を考え、司会・書記の役割が明確で

あり、ディスカッションも積極的になされ、スムーズに運営されていたことである。より、一層の学習効果を考えた場合、発表時のコメントラベルの活用は重要である。コメントラベルは、発表に関してのコメントを記載し、隣どうし交換し、発表者に手渡すことで、他のグループ・自分のグループの発表は客観的な評価になり、今後の資料となる。今後は、コメントラベルを作成して、意見を交換することや、参画の場つくりの方法を掲示していく必要があると考える。

参画とは⁹⁾、その場への参加者が、当事者と実施・評価・伝承段階に至るまで、自らその「場づくり」そのものにかかわり、自らその部分を担い主体的にその場に参加することである。学生の企画・運営そしてラベル新聞でのまとめの行動は、参集から参与の強いては参画学習への発展であると考え。今後はコメントラベルを作成して、意見を交換することや、更なる参画の場を提供していく必要があると考える。

まとめ

1) 日々の感想ラベル新聞を活用することで、グループの学びを共有し、学習の方向性が明確になり、次回

の学習課題が明確になる。

2) また、ラベル新聞の報告を受けることで、話し合いの内容や参加状況の把握ができ、指導方向が明確になる。

3) 中間報告会は、学生の自主的な企画・運営・積極的な意見交換の場となり、参画学習への発展の場となる。

引用文献

- 1) 永田美和子, 澁谷貞子: 課題別看護における授業効果の検討. 第26回研究大会発表論文集, 112-115, 2004.
- 2) 林義樹: 参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求—. 学文社 (東京), 2002.
- 3) 林義樹: 参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求—. 学文社 (東京), 219, 2002.
- 4) 林義樹: 参画活動とその指導の理論. 参画文化研究会, 2001.
- 5) 林義樹: 社会的創造活動理論としての『参画理論』. 日本創造学会第25回研究大会論文集, 101-104, 2003.

The Assessment of the Effectiveness of Nursing Classes for Each Assignment -Attempting to Utilize Labeling Newspaper-

Teiko Shibuya, Miwako Nagata

Abstract

We utilized labeling newspaper in nursing classes for each task, and assessed the effectiveness of the classes. From the assessment we obtained the following outcomes; by using labeling newspaper in each class, students could share the information with other groups, identify the direction and the purpose of learning, and have a clear understandings of next objectives for the following classes, through the report in the labeling newspaper, instructors were able to understand the content of the class discussions and the status of the students' participation, and determine the teaching strategies to facilitate students' learning. Furtherer more, the session for the interim reports, that was voluntarily organized and conducted by student provided the opportunities for students to exchange ideas and opinions actively, and for teachers to observe the effectiveness of the class. We also found that the session provided the opportunities to develop the learning in which involves in planning, organizing and conducting projects.

Keywords: Label work, Labeling newspaper, Nursing class for each assignment, The session for the interim reports